

和泉式部「くらきより」の歌の詠作年時

龍頭, 昌子

<https://doi.org/10.15017/12255>

出版情報 : 語文研究. 21, pp.12-20, 1966-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

和泉式部「くらきより」の歌の詠作年時

龍頭昌子

有名な和泉式部の「くらきよりくらき道にぞ入りぬべき遙か

に照らせ山の端の月」(朝日新聞社・日本古典全書150番・以下「くらきより」と略称する)は先人も言われるように和泉式部の精神的展開を窺う上に重要な歌であり、この歌の成立年代・成立事情を考えることは和泉式部の伝記研究上不可欠と思われる。以下この歌がいつ詠まれたかを検討してみたい。

—

与謝野晶子氏は日本古典全集で

母の縁故で昌子内親王(朱雀天皇皇女・冷泉院皇后)に仕え、十七才位で女房に加えられたが、その昌子内親王は小右記によると仏教の篤信者で播磨の性空上人を深く信仰していたので宮に仕えていた女房達も同じく上人を信仰し、和泉式部も「くらきより」という一首の歌を上人に贈った。それは拾遺和歌集に取められることとなったが彼女が道貞に嫁す前だったから同集の撰者が雅致女式部と署名したのではなかったか。

という意味のことを述べ、昌子内親王に出仕中に結縁の為の歌

を詠んだという説をとっておられる。

又岡田希雄氏は「国語国文の研究」第二十三号「和泉式部の恋愛生活」の中で

式部がこの歌を性空上人に贈った時代は不明だが若し花山院が微行、上人に会って結縁されたという寛和二年だとすれば式部は二十一才であり支障はない。しかしむろんいつということは想像できるものではない。という意味のことを述べて非常に消極的な説として寛和二年説をとっておられる。

岡崎知子氏は「文学・語学」昭和三十四年十三号の「和泉式部と性空上人——くらきよりの歌をめぐる——」の中で、結縁の時期として小右記寛弘二年五月三日の記事により、公任が播磨の書写山に登っており又同五月四日の記事により道長が性空上人のお告げにより仁王経千部供養を行っているという事実から

公任はおそらく個人的に上人に結縁する為に書写山に登ったのだろう。あるいは道長の内意をうけてちよと四日の仁王経供養に間に合うように播磨に出立したのかもしれない。いづれにしろもし仮りに式部が

性空への歌を託すとすればこれは丁度都合のよい機会であったことは確かである。

として寛弘二年四・五月説を有力な説として述べておられる。しかし長保三年三月、花山院の再度の御幸の時の従者に歌を託したと考えられないこともないとしておられる。

私はこの「くらきより」と「船よせむ岸のしるべも知らずしてえも漕ぎよらぬ播磨瀉かな」(808番・以下「船よせむ」と略称)は長保四年(102)六月十三日から同年の九月七日までに詠まれたものと思う。その理由を述べる前に与謝野氏、岡田氏、岡崎氏の論を少し検討してみたい。

まず与謝野氏の論についてみてみると、岡崎氏は前述の「和泉式部と性空上人——くらきよりをめぐって——」で

為尊、敦道兩親王等と式部との間に関係が始まったのも親王等がこの昌子内親王を継母としたからであるという説は岡崎氏、与謝野氏によって唱えられてより以来、式部の伝記に言及する諸学者のほとんどが踏襲しておられるがこれは式部の昌子内親王に仕えたということを含理化しようとするあまりの勝手な附加潤色である。

とし与謝野氏の「皇太后(昌子内親王)は播磨の性空上人を深く御信仰なさっていたから」という説に対しては、小右記の記事の検討から種々の実例をあげて昌子内親王が信仰していたのは性空上人ではないことを述べ「仮りにこの歌が式部の出世作であったにしろその製作の事情に太后を介入させることは正しくない」と述べておられる。氏が言われるように昌子内親王の縁で性空上人と結縁したということは否定できよう。

しかし岡崎氏のように式部の昌子内親王出仕を否定的に考え

ることは無理と思う。勿論、歌集その他の説話、伝説によっても昌子内親王に仕えたということを窺う資料は全然ない。しかし式部の昌子内親王出仕の可能性は充分ある。すでに先人の論文中にも指摘してあるが、まず式部の両親と昌子内親王との關係をみてみると、小右記長保元年九月十二日、十二月五日、及び日本紀略十二月一日の条に見えるように昌子内親王は大進であった式部の父雅致の宅(実は式部の夫権大進橘道貞の邸宅を借用していたものという)で逝去されている。

又式部の母は歌仙伝に「冷泉院皇后昌子内親王の御乳母介内侍、平保衡女」とでている。父母ともに内親王とは非常に関係が深かったことがわかる。

式部が昌子内親王に仕えたであろうと思われる理由として、次に拾遺集の前述の「くらきより」の歌の作者名が「雅致女式部」となっていることがあげられよう。彼女が公に「式部」と女房名を以て呼ばれていることは少くとも拾遺集成立以前において宮仕えをしたことを証するものである。

式部が道長女彰子に出仕した事実は歌集その他種々の資料によつてわかっている。しかし彰子に仕えたのは先人の研究により寛弘六年以後ということがほぼ確定になっている。しかるに拾遺集の成立は下限が寛弘五年二月以前であり、右の記事は、寛弘五年以前に式部がいつれの宮にか出仕したことを物語るものである。宮仕えをしたとするとやはり昌子内親王の宮が一番自然であろう。

長保年間には道貞に嫁し、彼と和泉国に下つたり、長徳末年頃生れたと思われる小式部の養育にも忙しかつたらうからこの期

間中の宮仕えは考えにくい。宮仕えを考えるとするとやはり小式部の生れる前、つまり式部の少女時代それも父母と縁の深かった昌子内親王に仕えたと考えられる。

右の様に宮仕えを式部の少女時代とする詞書の説明もつく。内親王に仕えたのが彼女の結婚前だったから雅致女式部とよばれたのである。これが数年彼女の呼び名となっていたのだろう。和泉式部とよばれるようになったのは彰子に出仕するようになってからであろう。式部が内親王に仕えたか否かについて考えるには、為尊、敦道両親王との関係をもやはり出仕を肯定した方がよさそうである。式部は昌子内親王に仕えた。しかし岡崎氏がすでに指摘されたように小右記の昌子内親王に関する記事は性空ではなかった。ところが内親王は證空の篤信者であった。若し式部は内親王の信仰する仏教の影響を大きく受けたことだろう。しかしだからといってそこですぐに内親王に出仕中に「くらきより」と「船よせむ」を詠んで性空上人に贈ったとは思えない。内親王より受けた仏教の影響は式部の心の中で暖められていったのだろう。それが後に述べるいくつかの原因で歌となつてあらわれてくるのだろう。

次に岡田氏の説をみてみよう。氏の寛和二年説は歌集で中山院歌合の詞書をもつ121番から149番までの歌を寛和二年の花山天皇内裏歌合と考え、それから式部の年令を当時二十才と推定して、花山法皇が寛和二年性空上人のもとに微行した時從者に託したのだろうとされていたが、これは氏御自身が後で訂正されたように右の三十九首の歌群は寛和二年の内裏歌合のもの

ではないのである。氏の説は寛和二年に式部二十才という前提から成立しているので、前提がくずれたからには考え直さなければならぬ。与謝野氏のように式部の出生を天延二年と考えると寛和二年には十二才。とても内裏歌合参加は勿論のこと（かの公任が二十才ではじめて歌合参加）、法華經の文句を踏んだという「くらきより」を詠んだということは無理なようである。

次に岡崎氏の寛弘二年説を検討してみよう。氏の寛弘二年説は一見無難のようではあるが、歌の内容から見た動機をみると、どうしてもしっくりといかなくなる。まず歌の意味から見ると、

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月

わたくしはい導師を得ない為今迄も煩惱の中に迷っておりました

が、このままだと更に深い闇へと迷って行ってしまうそうです。どう

か私の為には導師となつてわたくしを真理の世界へ導いて下さいませ。

（訳は「和泉式部集全釈」による。）

式部は性空上人のありがたい評判は常々聞いてはいたらしい。平安女性の楽しみの一つであつたかもしれないが式部もよく寺に参籠している。このようにある意味で信仰心の篤つた式部は日に日に有名になつて行く性空上人にあこがれ、いつか自分も結縁し教えを願いたいと心中ひそかに思っていたことだろう。

さて問題の岡崎氏の寛弘二年説であるが、この年は式部にとつて得意の絶頂の時である。長保五年十二月に敦道親王は式部を自分の邸に移したが、その寵愛が目にあまるものであつたか

らだらう、日記によると親王の正妃藤原濟時女は邸を出てしまつた。翌寛弘元年春には親王は式部を伴つて公任の白河院に行き、寛弘二年には式部と同車で加茂祭見物をしている。寛弘四年十月二日の親王の死に際して式部は百二十余の死を悼む歌を残しており、又後には親王との恋の思い出を日記にまで記している。それは親王と式部の関係が愛情の起伏こそあれ、親王の死の時まで続いたことを物語るのではないだろうか。まして寛弘二年はまだ式部が親王の邸に来て二年、親王の寵を一身に集めていたと思われる時である。

式部の歌集や日記によると、彼女は親王の邸にひきとられる前にすでに多数の男達と恋愛関係にあつた。数々の恋を経験した式部にとっては親王の寵愛を受けている時にでもふと恋を失う日のことが脳裏をかすめたかもしれない。又情熱を傾けて愛することはできなかつたが、心の底では愛し続けている夫道貞に対する申し訳なきから、又自分の行為が親兄弟を悲しませてゐるのだとわかつていてもどうすることもできない自分の罪深さに対する悔の情から「くらきより」を詠んだという可能性は大きい。しかしこのような歌を詠んだにしても親王の寵愛を受けている時だから、その寵愛に対してもこのような歌を性空上人に贈つたりしないだろう。もし詠んだにしても自分の歌反故の中に入れておいたことだろう。

私は「くらきより」と「船よせむ」が詠まれたのを長保四年六月十三日から同年九月七日までと考える。以下にその理由を

あげてみよう。

まず「くらきより」の歌が詠まれた背景であるが、式部は長保四年頃は勘当中であつた。式部が浮気の為に勘当されたといふことは歌集に数多く見える。勘当されたのがいつであるかを考えてみなければならぬ。

105(年)、106(式部、公任の贈答)・182(赤染より)・183(ある人の歌に対する式部の返歌)・364 365(赤染・式部の贈答)等から見てもわかるように道貞と式部は寛弘元年には先人も言われるように離婚してゐた。ではいつ離婚したか。長保年間には式部は道貞の任国である和泉の国に下つたりしている。だから離婚したのは和泉国から上京した後と考へなければならぬ。

では、いつ夫の任国である和泉国に下つたのであろうか。歌集では長保年間の歌群の中に流行病がはやつたことを思わせるような詞書を持つものがある。これは長保二年冬から同三年夏にかけて猛威をふるつた流行病に関するものではないだろうか。長保年間の記録に残っている流行病はこの一例だけである。この流行病のはやつた一時期に式部は都にいたと考へることができらう。ところが彼女の和泉国下向は次の理由によりどうしても長保二年夏から秋にかけて以上は遡ることはできない。道貞が和泉守に任ぜられたのは長保元年二月のことであり小右記の長保元年九月二十二日の条には「道貞権大進兼和泉守」とみえてゐる。十二月一日には前述のように昌子内親王が道貞邸でなくなつてゐる。又翌長保二年一月二十日には道貞在京の記事が見える。昌子内親王がなくなつたからには権大進である道貞はとて任国には下れなかつたことだろう。そこで道貞はお

そらく長保二年秋か冬に式部を伴って任国に下向したと思われる。ところが式部は都で流行病に遭ったと思われるのである。としたら長保三年春頃彼女は単身上京したのではないだろうか。200・201・242・243等の歌をみると、道貞が和泉国在任中にすでに京に在る式部の浮気が原因で離婚（正式でないにしろ）ということになったのではないだろうか。

更に離婚の原因を歌集にさがすと、661・850等がみえる。又107、111の一連の歌にみえるように公信少将や雅通少将とたむわれの歌を贈答している。宮仕えの女房ならいざ知らず、式部は家の夫人なのである。この歌は全釈で詳しく研究されているように長保元年から長保四年四月までのことである。雅道の関係などからみてもこの歌は長保三年か四年の四月の歌だと思ふ。とすればこれも当然離婚の一原因となるはずである。

長保三、四、五年頃には名前がわかるだけでも、源雅通（日記では源少将）や治部卿（日記では源俊賢か。異本では兵部卿・兵部卿としたら藤原隆家となる。）や源道濟・源頼信・為尊親王等が式部のところに通って来ている。為尊親王と式部との関係は栄花物語（鳥辺野・初花）に見えるがこの記事から見ても当時二人の仲は広く知れわたっていたものと思われる。

式部の浮気の原因が彼女にあったのか道貞にあったのかはわからない。しかし結果としてこのように世間に浮き名を流し、実際にも数人の男達が式部のところに通ってきいているとしたら、道貞としては離婚、式部の両親としては勘当という方法をとるより外にはなかったのだろう。

長保四年頃式部の両親は彼女の常規を逸する行動にあまりか

ねて彼女を勘当した。又道貞も任国から上京して来て式部のところには来なくなった。離婚、勘当に続いて更に悪いことが起った。長保四年六月十三日、為尊親王が薨じた。式部は親王の死に對しては歌を残さなかった。親王は式部のところに通って来る多くの男達と同様式部の心を強くとりえる程の相手ではなかったと思われる。

式部は親王の死のうわさを聞き、親王の死を悲しむというよりは自分の人生に何か不吉な影を感じたのではないだろうか。自分の軽卒で好色な行動から両親をはじめ、はらからをも失い、生れてはじめて愛した道貞をも失った暗くさびしく悲しい毎日の中で自分の前世の因縁などを考えていた式部に、又自分に関係のある男の一人である親王の死が伝えられた。しかも親王は二十六才という若さである。式部は何か漠然とした不吉なものを自分の身辺に感じたことだろう。

さて同時に作られた（岡崎説）というもう一首の前掲「船よせむ岸のしるべも知らずしてえも漕ぎよらぬ播磨瀧かな」であるが、これらの歌を詠み性空上人に贈ったということはつまり性空上人への歌を託すことのできる「しるべ」が見つかったという意に解することができよう。今その「しるべ」について考えてみよう。権記によると、長保四年九月七日の条に

書写聖影像、昨以則光朝臣、令奉花山院、今朝基頼朝臣来示遯参之由、然而令奉昨進上由了

とみえるが、問題になるのは則光朝臣である。則光朝臣とは橘則光のことである。則光はどういう人物であったか。彼の初期

の妻であった清少納言の枕草子（岩波古典大系82・84・133段）によると、彼は純情そのもので朴訥な人間のように書かれている。ところが今昔物語や宇治拾遺物語では彼はなかなか武勇があり気骨のある人物となっている。（彼は一条天皇の頃女の許に通う時、三人の怪しい男に襲われて、たった一人でその三人の賊を切り殺したと言う。又江談抄には斉信大納言宅で盗人をとらえたという記事が見える。）枕草子における則光はあくまでも後宮におけるポーズであって、本来の則光は今昔物語に見える則光であり花山院の忠実な近侍の則光ではなかったらうか。則光の母は小右記の長徳三年四月十七日の則光の注記によると、花山院の御乳母としてあがった人だとあり、花山院と則光は乳兄弟である。

次に則光に関係の深かった人で式部にも親交のあった人物について考えてみよう。まず家集329の

雲林院にすむころ越後守のりなかに

きかせばや哀れを知らむ人もな雲の林の雁の一声

にみえる越後守のりなかについて見ると右の歌は『全釈』には「のりなかのおとづれを待つ心をほめかしたものとある。

この「のりなか」は従来二つの説があり、藤原範永であるか橘則長であるかまだ決定していない。

この329の歌が詠まれたのはこの329の前後約二十首ばかりの歌の年代からみておそらく治安年間（1021〜1031）であろう。又岡田氏の論文からもその推定は強まる。岡田氏は「和泉式部伝の研究」の中で「のりなか」が越後守になる可能性があるのは治安年間と長元二、三、四年（1029〜1031）の間と述べておられる。又

氏の論文によると範永は治安二年には甲斐権守であるので越後守となる可能性は長元年間のみとなる。則長については詳しい資料が今日残っていないので治安・長元年間の彼のことはわからないが、彼がこの期間中に越後守となり得る可能性は十分にある。岡田氏の御研究による則長の越後守となる可能性のある年と私が推定した年が治安年間という点で一致する。

次に岡田氏は範永は式部の娘小式部内侍の恋人であると述べておられる。そしてこの329の「のりなか」も範永であらうとしておられる。小式部は、万寿二年（1025）に藤原公成の子を生んでなくなっている。この歌が詠まれた治安中、範永は小式部と恋愛中であつたかも知しくは忘れられた頃かであらう。少くとも関係のある前とは考えられない。小式部の母である式部が自分の娘の恋人又は昔恋人だった男の興味を惹いてみたりするだろう。範永の生歿年は不明であるが、寛仁元年に藏人になつていたので、治安中は二十才前後から三十才前後と考えてよいだろう。自分の娘と恋愛関係があり、しかも自分の子供とも考えられる位の年令の者に冗談にも気を惹いたりするだろうか。恐らくしないだろう。

ところが橘則長をみてみよう。彼は天元五年に則光の長男として生れている。則光十八才の時清少納言が生んだ子である。

治安中、則長は四十才以上、式部は四十四、五才である。329は治安中の歌であること、又範永は小式部の恋人であつたこと、治安中における式部、則長の年令の関係、以上の理由により私は「越後守のりなか」を橘則長と推定する。このような冗談の歌を贈るほどだから則長と式部はかなり親しい間柄だったと思わ

れる。

則光の妻であった清少納言と式部との関係は如何であっただろうか。和泉式部集には六首の贈答歌が見られるのみであるし、又それが二人共に年をとっているらしいことから中年以後に生じた交友関係かもしれないがこれ以上明かにはならない。

以上則光と式部に関係の深い、則長、清少納言の現存資料を見てみたが、則長とは親しい付き合いだったと思われるのが治安年間の記事のみ。清少納言とも非常に親しかったと思われるが、これも万寿年間（1024→1027）と思われる頃の記事のみである。則長、清少納言、式部との関係はそれぞれ治安、万寿年間に生じたとも考えられるし、一方長保年間、又はそれ以前からずっと続いた関係とも言える。

これらの資料のみでは何とも言い難いが、則光、則長、清少納言が深い関係があること、又則長、清少納言、式部の親交が窺われることから式部、則光の交友関係を想像することも強ち無理なことではないだろう。

もう一つ則光、式部の間に交友関係があったと思われるものを述べてみよう。

式部が少女時代に仕えた昌子内親王は花山院の御継母である。彼女は出仕中、若年の花山院にお目にかかれることはなかったにしても、花山院の御乳母子である則光とは交際する機会があったと思われる。もしかしたら後の則長、清少納言との親交も

則光との交友関係から発展したのかもしれない。又その逆も充分考えられるが。

花山院の性空上人への傾倒ぶりは、

寛和二年七月 書写山に行幸

長保四年三月六日 再び書写山に行幸

長保四年八月十三日 (前述権記の記事)

院は巨勢広貴に上人像を描かせ、具平親王に讃を作らしめ、これを行成に書かしめた。

長保四年九月七日 (前述権記の記事)

絵が完成、進上さる。

などの事実がよく物語っている。又、今井源衛先生の論文「花山院研究(その2)」（文学研究第五十八輯・昭和三十四年七月）によると、書写山円教寺旧記の記事に長保四年三月六日の花山院の再度の結縁に則光も従者の一人として供奉しており、又右の権記の記事によれば性空上人の肖像を進上するのに則光が関係していることもわかる。

察するに、前述のように式部は夫道貞との離別、両親からの勘当、若い恋人の一人であった為尊親王の死、と次々に不幸なことが重なり、自分の身やその周辺に不吉な予感を感じ、又我が身の不幸、罪深さを思い、「くらきより」を詠んだのだろう。

ありがたい性空上人にすがりたいという気持が切実で、だからこそそれは何の技巧もない、公任のいう「経の文なれば云ふに及ばず云々」というような歌になったのだろう。暗澹とした日

々の中で式部は常々親しんでいた仏典、法華經化城喻品の中の「衆生常苦惱、盲冥無導師、不識苦尽道、不知求解脫、長犯増悪越、減損諸天衆、從冥入於冥、永不聞仏名」という句が浮びそれを歌に詠んだ。ちようと花山院の再度の書写山行幸が済み、性空上人に肖像画を奉る為にその制作をはじめた頃であった。式部は花山院の行幸の従者の中に知人の則光を見た。そこで彼女は則光に歌を託したら性空上人に贈ることができるだろうと考えた。「船よせむ」の歌はやつと則光という「しるべ」が見つかったという心をよんだものだろう。

以上のことを要約すれば次の通りとなる。「くらきより」は長保四年六月十三日（為尊親王の死）から同年九月七日（花山院が性空上人に肖像を奉る）に詠まれたものだろう。その時期は、道貞との離別、両親からの勘当、恋人の一人為尊親王の死という不幸が重なっていた時である。花山院は彼女の「くらきより」の歌を自分の近侍であり乳兄弟である橘則光を通じて知らされたことにより、自分と同じように不吉の影におびえる一人の人間としての和泉式部を知った。花山院は「くらきより」に心打たれた結果、その歌を拾遺集、後十五番歌合に撰入することとなった。

又ついでに言えば、拾遺集、後十五番歌合は撰者についていろいろと言われているが、「くらきより」がとられているという事実からも、拾遺集は花山院の命を受けて公任以外の人物（公任は「くらきより」の価値を認めていず、公任の当時の歌壇的地位から見ても花山院の意志を無視する力はあつたはず）に

よつて撰されたものと見たいし、又後十五番歌合も撰者を従来公任とするか花山院とするかに説が分かれているが、私は「くらきより」が撰入されていることから、この撰者を萩谷朴氏の説の通り花山院にした方が適當ではないかと思う。

又、小室、田中両氏の「和泉式部日記詳解」あるいは岡地文子、鈴木一雄両氏の「全講和泉式部日記」の長保五年頃、和泉式部に花山院出仕の話があつたとする説も、今のところ、為尊親王の縁で出仕したと言われているだけであるが、「くらきより」の成立年代を右のように見れば花山院出仕の話も可能性が大きくなる。又不明の点の多い花山院歌合の時期やその形式出席者についても考えを發展させることが可能と思われ、萩谷氏による小右記の寛弘二年の不被行歌合との関係も考えられるようである。

注1

又左衛門督（公任）陸奥守（道貞）の下りしころそれにうち添へたることぞ見し

105 いまさらに霞のとつる白河の関をしいでは尋ぬべしやは

まろ返し

106 ゆく春のとめまほしきに白河の関を越えぬる身ともなるかな

赤染がもとより

182 行く人もとまるもいかに思ふらむ別れて後の又の別れを

去りたる男の遠き国へ行くをいかが聞くといふ人に

183 別れても同じ都にありしかばいとこの度の心地やはせし

道貞去りて後、師の宮に参りぬと聞きて赤染衛門

364 移ろはでしばし信太の森をみよかへりもぞする萬の裏風

返し

365 秋風はすこくふくともくずの葉のうらみがほには見えじとぞ思ふ

注2

160 物へ行く道にははらやに火屋といふものを造るを見て帰れてその夜云々
161 又人の葬送するを見て

世の中騒しきころ語ふ人の久しく音せぬに

184 世の中はいかになりゆくものとしてか心のどかに音づれもせぬ

注3

いさらゑする事ありて男(道貞)の家を去るとて常にする枕に書
きつくる

200 かはり居む塵ばかりだにしのばじな荒れたる床の枕見るとも

つらき心ありし人(道貞)の田舎より来て音もせぬ

201 来たたりとも言はぬぞつらきあるものと思はばこそ身をば恨みむ

津の国より人(道貞)の言ひおこせたる

242 忘草つむ人ありと聞きしかば見にだにも見ずすみよしの岸

返し

243 忘草つむほどとこそ思ひつれおぼつかなくて程のへつれば

注4

こころうきを見る見るたのむはわが心にもあらぬにやといふ男(道
貞)に

661 われもわれ心もしらぬものなればいかがつひにはなるとこそ見ぬ

陸奥国へいひやる

850 高かりし浪によそへてその国にありてふ山をいかにみるらむ

▼受贈雑誌 昭和40年6月〜12月

- 国語と国文学 7〜12月、国語国文 6〜12月、国文学解釈と鑑賞
7〜12月、国文学解釈と教材の研究 7〜12月、文学 7〜12月、
国学院雑誌 6〜10月、学苑 7〜12月、文献ジャーナル 7〜11月
八雲 7〜12月、白路 6〜12月、日米フォーラム 7〜11月、肇国
7〜10・12月、日本文学(日本文学協会) 6月、解釈 4〜8月
成城文芸 39、人文論究(北海道学芸大学函館人文学会) 25、女
子大國文(京都女子大学) 37〜39、書陵部紀要 16、人文研究所
報(神奈川大学) 1、人文研究(神奈川大学) 30、人文学報(東
京都立大学) 45、国文学攷(広島大学) 36〜38、立命館文学
232〜243、論究日本文学(立命館大学) 25、日本文学誌要(法政
大学) 12・13、法政大学文学部紀要 10、文学論集(佐賀大学)
6、大阪府立大学紀要 13卷 3、国文学漢文学論叢(東京教育大
学) 3、言語と文芸(東京教育大学) 40〜42、岐阜大学研究報
告 13、国文(お茶の水女子大学) 23、文芸研究(東北大学) 50
国語学研究(東北大学) 5、文学論藻(東洋大学) 31・32、音
声学会会報 119、平安朝文学研究 2卷 1、跡見学園国語科紀要 13
語文(日本大学) 21・22、金沢大学教育学部紀要 13、国語研究室
(東京大学) 4、名古屋大学文学部研究論集 27、静岡女子短大
研究紀要 11、文車(大阪大学大学院) 13・14、太宰研究 7・8
文芸と批評 8・9、万葉 56・57、中世文芸 32・33、国文目白(日
本女子大学) 4・5、相模女子大学紀要 20・21、連歌俳諧研
究 28、愛媛大学紀要 10卷、文芸研究(明治大学) 13、山口大学
文学会誌 16卷 1、田唄研究 8、国文学(関西大学) 38、能楽思
潮 32・33、国語学 61・62、(以下五十五頁へつづく)